

6. 女性の暮らし

木 下 千 絵 美

1. はじめに
2. 家庭内外での仕事
3. 地域内組織での活動
4. 考察
5. おわりに

1. はじめに

今回の調査実習で初めて訪れた若山地区は、海と山に囲まれた豊かな自然に恵まれており、また地域ならではの伝統や文化にもあふれていた。聞き取り調査をするなかで、私は女性の方とお話しをする機会が多かったのだが、彼女たちの優しい笑顔と、明るく気さくに接してくれたおかげで、私もどこか安心して聞き取りをおこなうことができた。このようななかで、この地で彼女たちはどのように暮らしてきたのか、そのなかで暮らしが変化することはあったのか、そしていま彼女らが抱えている問題はないのか、ということに同じ女性として興味をもち、詳しく知りたいと思った。

本章は、今回の調査地である若山町 5 地区（経念・古蔵・中田・火宮・向）における女性の暮らしについて取りあげ、その歴史と現状について考察するものである。以下、第 2 節では、農業、就業、家事といった仕事内容を通して、家庭からみた女性の暮らしについて述べ、第 3 節では、地域の婦人会の活動を通して、地域からみた女性の暮らしについて述べる。

2. 家庭内外での仕事

この節では、若山町 5 地区の女性が、家庭内外においてどのような仕事をしていたのかを述べていきたい。

2.1 農業

まず、農林統計協会「農林業センサス」をもとに、若山町5地区の女性が農業にどのように関わってきたのかをみていきたい。

表1 若山町5地区の就業状態別世帯員数（単位：人）

年次	男	自営農業 だけに従事	自営農業・その他の仕事に従事		その他の仕事 だけに従事	仕事に従事 しなかった
			自営農業が主	その他の仕事が主		
1960	330	51 (15.5%)	51 (15.5%)	139 (42.1%)	53 (16.1%)	36 (10.9%)
1970	280	44 (15.7%)	16 (5.7%)	186 (66.4%)	13 (4.6%)	21 (7.5%)
1975	279	33 (11.8%)	7 (2.5%)	210 (75.3%)	8 (2.9%)	21 (7.5%)
1980	273	22 (8.1%)	5 (1.8%)	196 (71.8%)	19 (7.0%)	31 (11.4%)
1985	266	32 (12.0%)	9 (3.4%)	181 (68.0%)	13 (4.9%)	31 (11.7%)
1990	237	39 (16.5%)	7 (3.0%)	147 (62.0%)	13 (5.5%)	31 (13.1%)
販売農家	204	34 (16.7%)	7 (3.4%)	128 (62.7%)	7 (3.4%)	28 (13.7%)
1995	212	39 (18.4%)	5 (2.4%)	132 (62.3%)	10 (4.7%)	26 (12.3%)
販売農家	175	34 (19.4%)	5 (2.9%)	109 (62.3%)	6 (3.4%)	21 (12.0%)
2000						
販売農家	145	37 (25.5%)	2 (1.4%)	80 (55.2%)	12 (8.3%)	14 (9.7%)
05年販売農家	116	16 (13.8%)	17 (14.7%)	58 (50.0%)	15 (12.9%)	10 (8.6%)

年次	女	自営農業 だけに従事	自営農業・その他の仕事に従事		その他の仕事 だけに従事	仕事に従事 しなかった
			自営農業が主	その他の仕事が主		
1960	363	224 (61.7%)	29 (8.0%)	33 (9.1%)	14 (3.9%)	63 (17.4%)
1970	334	123 (36.8%)	52 (15.6%)	108 (32.3%)	20 (6.0%)	31 (9.3%)
1975	327	117 (35.8%)	7 (2.1%)	154 (47.1%)	9 (2.8%)	40 (12.2%)
1980	321	110 (34.3%)	8 (2.5%)	135 (42.1%)	16 (5.0%)	52 (16.2%)
1985	301	103 (34.2%)	8 (2.7%)	119 (39.5%)	19 (6.3%)	52 (17.3%)
1990	273	98 (35.9%)	5 (1.8%)	104 (38.1%)	15 (5.5%)	51 (18.7%)
販売農家	230	87 (37.8%)	5 (2.2%)	90 (39.1%)	10 (4.3%)	38 (16.5%)
1995	267	94 (35.2%)	2 (0.7%)	95 (35.6%)	21 (7.9%)	55 (20.6%)
販売農家	216	76 (35.2%)	2 (0.9%)	79 (36.6%)	16 (7.4%)	43 (19.9%)
2000						
販売農家	163	56 (34.4%)	1 (0.6%)	57 (35.0%)	18 (11.0%)	31 (19.0%)
05年販売農家	119	39 (32.8%)	10 (8.4%)	35 (29.4%)	17 (14.3%)	18 (15.1%)

（出所：農林業センサス）

表1は、若山町5地区の男女別の「就業状態別世帯員数」を表したものである。「就業状態別世帯員数」とは、農家の15歳以上（1990年までは16歳以上）の世帯員について、調査期日前1年間の自営農業及びその他の仕事についての従事状況と、ふだんの主な状態との組み合わせにより、「自営農業にのみ従事した人」、「自営農業とその他の仕事の両方に従事した人」（これはさらに「自営農業が主の人」と「その他の仕事が主の人」に二分されている）、「その他の仕事にのみ従事し

表2 若山町5地区の農業就業人口（単位：人）

年次	男女計	男					
			15～29歳	30～39歳	40～59歳	60～64歳	65歳以上
1960							
1970	235	60	7 (11.7%)	1 (1.7%)	13 (21.7%)	13 (21.7%)	26 (43.3%)
1975	164	40	10 (25.0%)	1 (2.5%)	1 (2.5%)	4 (10.0%)	24 (60.0%)
1980	145	27	3 (11.1%)		3 (11.1%)	3 (11.1%)	18 (66.7%)
1985	152	41	5 (12.2%)	1 (2.4%)	4 (9.8%)	6 (14.6%)	25 (61.0%)
1990	149	46	2 (4.3%)	3 (6.5%)	3 (6.5%)	13 (28.3%)	25 (54.3%)
販売農家	133	41	1 (2.4%)	3 (7.3%)	3 (7.3%)	13 (31.7%)	21 (51.2%)
1995	140	44	2 (4.5%)	3 (6.8%)	1 (2.3%)	5 (11.4%)	33 (75.0%)
販売農家	117	39	2 (5.1%)	3 (7.7%)	1 (2.6%)	4 (10.3%)	29 (74.4%)
2000							
販売農家	96	39	5 (12.8%)		4 (10.3%)	2 (5.1%)	28 (71.8%)
05年販売農家	82	33	1 (3.0%)		3 (9.1%)	3 (9.1%)	26 (78.8%)

年次	女					
		15～29歳	30～39歳	40～59歳	60～64歳	65歳以上
1960						
1970	175	20 (11.4%)	23 (13.1%)	74 (42.3%)	22 (12.6%)	36 (20.6%)
1975	124	8 (6.5%)	5 (4.0%)	44 (35.5%)	20 (16.1%)	47 (37.9%)
1980	118	4 (3.4%)	6 (5.1%)	41 (34.7%)	20 (16.9%)	47 (39.8%)
1985	111	3 (2.7%)	1 (0.9%)	44 (39.6%)	18 (16.2%)	45 (40.5%)
1990	103	3 (2.9%)	2 (1.9%)	30 (29.1%)	19 (18.4%)	49 (47.6%)
販売農家	92	2 (2.2%)	2 (2.2%)	27 (29.3%)	17 (18.5%)	44 (47.8%)
1995	96			20 (20.8%)	23 (24.0%)	53 (55.2%)
販売農家	78			14 (17.9%)	18 (23.1%)	46 (59.0%)
2000						
販売農家	57	2 (3.5%)	1 (1.8%)	9 (15.8%)	9 (15.8%)	36 (63.2%)
05年販売農家	49	1 (2.0%)		7 (14.3%)	9 (18.4%)	32 (65.3%)

(出所：農林業センサス)

た人」と「仕事に従事しなかった人」に区分したものである。「世帯員」とは、原則として住居と生計を共にしている人たちのことである。「自営農業」とは、自家農業（自家で経営している農業）に農作業受託を含めたものをいい、1990年センサスから適用されている。なお、1985年までは自家農業の範囲で把握されている。また、「販売農家」は、経営耕地面積30a以上又は農産物販売金額50万円以上の農家のことであり、1990年センサスから、農家をさらに区分するために使われている（農林統計協会、2000）。

表1をみると、男性は、「その他の仕事の主の人」の割合が、どの年次でも他と大きな差をつけて一番大きく、その数は、「自営農業にのみ従事した人」と「自営農業が主の人」を合わせた数よりも大きいということが分かる。一方女性は、「自営農業にのみ従事した人」の割合の大きさが、

男性と比べると顕著である。しかしここで注目したいのが、「自営農業とその他の仕事の両方に従事した人」の数であるが、1960年から1970年にかけて爆発的に増加している。それにともない、「自営農業にのみ従事した人」が大きく減少している。1975年以降、「自営農業が主の人」は減少していくが、「その他の仕事为主の人」は変わらず大きな割合を占め続けている。

表2は、若山町5地区の男女別の「農業就業人口」を表したものである。「農業就業人口」とは、農家の15歳以上（1990年までは16歳以上）の世帯員のうち、調査期日前1年間に農業にのみ従事した人又は農業とその他の仕事の両方に従事した人のうち、農業が主の人のことである（農林統計協会、2000）。つまり、表1の「自営農業にのみ従事した人」と「自営農業が主の人」がそれに当てはまる。

表2をみると、男性がどの年次においても、65歳以上の割合が他とは大きな差をつけて一番大きいことに対して、女性では違う傾向が見られる。女性もやはり全体的に65歳以上の割合が大きいものの、1970年では40～59歳の割合が一番大きく、1975年から1985年にかけては65歳以上の割合が上回っているが、両者にそれほど違いはない。また、1970年以降の15～39歳の割合の大きな減少も気になる。1990年以降になると、65歳以上の人口に大きく偏ったものとなるが、男性と違い女性は、ここ数十年の間に農業就業人口における年齢層の割合が大きく変化したといえる。

以上のことから若山町5地区の女性は、時代を通して農業の主要な担い手となっているが、特に若・中年女性において、脱農化が進行していることも分かる。

2.2 縫製工場

女性たちに聞き取りをしていると、縫製工場で働いた経験を話してくれる方がとても多かった。若山とその周辺の地域には、かつて多くの縫製工場が操業されていたようで、聞き取りをしているなかでも、複数の工場の名があがり、なかにはそれらの工場を転々としながら働いた人もいた。縫製工場で約30年間働いたAさん（古蔵、女性、60代）は、「縫製工場がピークの頃（約20年前）は、まわりの女性たちは、他に仕事をしている人でも引き抜かれたり、70、80歳の人でもアイロン掛けによべれたりしていた」と話してくれた。このように若山の地に工場が進出し、女性たちの暮らしに大きな影響をおよぼすまでには次のような経緯があった。

高度経済成長期において日本各地で工場誘致条例が制定された。これは、人口の大都市集中傾向が顕著になり地方で中学を卒業した若者が都会へ就職し、そのために地方が高齢化する傾向が明確になりその対策のために講じられたものである。

珠洲市は昭和33（1958）年という早い段階で条例制定が行われている。その内容は、（1）投資額400万円以上又は従業員50人以上の工場に、（2）納税義務の確定した年から五年間、（3）当該工場に係る市民税及固定資産税額の合計額を限度に、（4）初年度は100分の100、第2年度は100

分の 80、第 3 年度は 100 分の 60、第 4 年度は 100 分の 40、第 5 年度は 100 分の 20 に相当する金額を、(5) 奨励金として交付する、というものである。また、昭和 45 (1970) 年には過疎振興対策のための固定資産税の課税免除に関する条例も制定された。こうした条例の適用をうけて、企業が実際に進出してきたのは、昭和 39 (1964) 年の三ノ葉ファッション (野々江町) が最初であった。そして若山では昭和 46 (1971) 年 1 月に能登縫製 KK が古蔵にて創業された。10 年ほど前に倒産したが、条例適用のなかでは従業員が 130 人を超えて 1 番多かった。

このような誘致工場の多くは市の優遇措置を基盤に、奥能登の安価な労働力を求めて進出してきた。条例制定は国や県の過疎化対策の一環であったが、地方における若年労働力の流出を防止し、同時に市の財政事情をも改善することを期待したものであり、直接的には農業や漁業だけで生計をたてられなくなってきた地元の人々に、働く機会を与えるものであった。新しい工場で働く従業員の大半は家庭の主婦で、縫製工場の日給 2500 円前後の労賃は、家庭の主婦にとっては格好の現金収入として歓迎されていたようだ (野本 2012 : 65-67)。

さきほどの農林業センサスをみると、「就業状態別世帯員数」でみられる「その他の仕事が主の人」の著しい増加と、「農業就業人口」でみられる若・中年層の減少と高齢者層の増加の時期は、誘致条例によって工場が創業された時期とほぼ一致する。以上のことから、誘致条例による工場の進出は、とくに農業に従事してきた若山町 5 地区の若・中年層の女性たちにとって、かつてない農外労働力市場の拡大となり、また多くの女性たちがこれらに重点を移行した形で農外へ流出したということがいえる。

2.3 聞き取りから得られた事例

実際に聞き取り調査をして、若山町 5 地区の女性の家庭内外での仕事について、彼女らが若山に嫁にきた頃から現在までのお話をきくことができた。ここでは、それらの具体的な事例をみていきたい。

B さん (経念、女性、70 代)

50 年前に嫁にきて、能登縫製で約 30 年間働いた。農業をやりつつ働いていたので、起床→田畑の仕事→家事→8 時から 17 時までで工場で勤務→田畑の仕事→家事→就寝、というのが一日の流れだったそうだ。また、冬になると縄ないや、山を所有していたため下刈りをするといった仕事もしていた。

C さん (火宮、女性、60 代)

C さんも、縫製工場で働いた経験をもつ。子どもが小さかった頃は家の農業を手伝っていて、この頃は米作りだけをしていても収入がよかったが、子どもが小学校に通いだす頃には農業収入

は悪くなってしまった。それでより多い現金収入を求めて 30 代で仕事を始めた。「手に職をもっている人には働き口は多くあるが、自分には手に職がないものだから、工場ができて、そこで働けるようになったときは嬉しかった」と話してくれた。日曜日は田んぼ仕事にあてて、また田植えや稲刈りの時期には休みをもらいながらも、約 10 年間働いた。その後も家庭や体に合わせながら、工場以外での仕事を続けているそうだ。

D さん（中田、女性、70 代）

結婚する前から定年まで、小・中学校で養護教諭をしており、農業はお手伝い程度にしていた。上の世代では「女は家のことと子育てをしろ」というような風潮であったらしいが、自分たちの世代になると、生活のために女性でも職についていることが求められたそうだ。子どもはおじいちゃん、おばあちゃんに世話をしてもらい、保育所も整備されて働きやすかったという。

E さん（中田、女性、60 代）

地方公務員として働きながらも、仕事のない土曜日午後から日曜日にかけては主人と一緒に田んぼ仕事をしていたそうだ。自分たちが食べる分だけを作っていたが、余った分は農協に売っていた。平成 4 年に行われた耕地整理で田んぼが広がってからは、「すえひろ」という農業法人に委託している。

F さん（火宮、女性、70 代）

地方公務員として働き、仕事がない日には田んぼ仕事をしていたそうだ。そのなかでも毎日の家事は大変であったそうで、かまどや薪を使つての炊事や、たらいと洗濯板を使つての洗濯、広い家での掃除のために、毎朝必ず 4 時に起き、24 時すぎに寝ていたようだ。退職後も家で農業をしている。

今回、私が聞き取りをさせていただいた女性は 60～70 代の方が多く、また彼女らが若山に嫁にきた頃というのは、女性の働く場が増えはじめ、それによって女性の脱農化が進行した時期だということが、これまで述べてきたことから分かる。しかし実際にお話を聞いていると、季節や家によって労働量に違いはあったと思うが、ほとんどの女性が、私の想像以上に農業にも深く関わっていた。特に縫製工場で働く女性は、朝に田畑の仕事をし、日中は縫製工場で働き、夕方帰ってきてからはまた田畑の仕事をし、という生活をする方が多かった。しかし現在では、農業収入の悪化、そして平成 4 年に行われた耕地整理などを機に農業をやめる家もあったようで、昔のように継続して農業を続けている方は少なかった。E さん（中田、女性、60 代）は、「昔は米を作らないとあかんから作ってた。ずいぶん忙しい毎日を送っていた分、今は楽な生活をしているよ」とも話してくれた。

3. 地域内組織での活動

この節では、若山町5地区の女性活動組織である「東若山婦人会」と「中田婦人会」に着目し、そこでの女性の活動の様子を述べていきたい。

3.1 婦人会の成り立ち

そもそも婦人会とは、婦人の相互の親睦と教養の向上、家庭及び地域社会の民主化を目的とする社会教育関係団体であり、各单位婦人会は、その目標や性格からみると多少の相違があるが、共通の点として、「子どもをどう育てていくか」、「戦後の新しく課せられた婦人の社会的役割を、どう理解し実践していくか」、あるいは「家庭生活や地域社会を民主化し合理化して、家づくり町づくりをし直そう」とする点があげられる。

婦人会の事業は、発足当時は(1)婦人の教養や能力を高めること、(2)生活を合理的に改善すること、(3)子どもや青少年を健全に育てること、(4)社会奉仕、などを主としおり、そのための講演会・講習会・研究発表等が行われてきた。その後、(5)婦人学級の開設または、協力、(6)生産・営農の研究、(7)体育・レクリエーションにも積極的を示している。

珠洲市内には、小学校校下を単位とする二十四の地域婦人会があり、また、その連合体として市婦人団体協議会が存在している(珠洲市編さん委員会 1966:587)。

3.2 東若山婦人会

「東若山婦人会」は「珠洲市婦人団体協議会」の下部組織である。東若山小学校校下の女性たちが入会しており、その地区というのは、今回の調査地である経念、古蔵、火宮、向と、さらに出田、広栗、鈴内の7地区が含まれる。かつては中田地区も含まれていたが、平成24(2012)年4月に脱退した。

東若山婦人会の現会長は鈴内在住の方で、副会長は出田と火宮在住のお二方、会計は向在住の方である。現在は120名ほどが在籍しており、年1回3月末に開かれる総会にはほぼ全員が集まるそうだ。そこで年会費の500円を集めている。また婦人会への入会資格は特になく、東若山小学校校下の既婚女性なら誰でも入会できるが、実際はほとんどが60~70歳の会員である。Gさん(火宮、女性、60代)は、「若い人たちは、声をかけても参加をしない。関心がないみたい。」と話してくれた。

東若山婦人会の活動内容としては、「庭まつり」、「盆踊り大会」、「文化祭」といった若山の行事への参加や、「料理教室」、「県政学習バス」などがある。「庭まつり」は、再興してから今年(2012年)で26回目を迎えた行事である。昔は田植えのひと段落した時期に、各集落の大農家(おやっ

さん) の土間庭に輪になって村の老若男女が唄い踊り明かしたと伝えられている祭りで、大きな庭を持つ人の家で、もちつきや田植え踊り、野菜の販売などを行っていた。一度は途切れたが、現在では庭まつり実行委員会の主催で復活し、「庭おどり」などを踊ったりしている。その際に婦人会は豚汁の振る舞いをしている。「盆踊り大会」は毎年 8 月 14 日に若山小学校で行われる行事である。婦人会は午前中から準備を手伝い、夜になると盆踊りに参加する。「文化祭」については後に詳しく記述する。「料理教室」では、健康増進センターの方にレシピを書いてもらい、それを皆で作っている。「県政学習バス」では、年 1 回ダムに見学に行くなどをしている。その他にも、平成 23 (2011) 年には、区長や民生委員会と共に認知症についての講演会を企画するなど、会長ら役員 4 名は月に 1 度集まり、婦人会の活動などについて話し合いをしているそうだ。行事の連絡や出欠確認は地区ごとの役員がしている。毎回行事への参加率は 50 パーセントほどで、時間の空いている人や関心のある人が参加している。

3.3 中田婦人会

先に述べたように、平成 24 (2012) 年 4 月、中田地区は東若山婦人会から脱退した。もともと中田婦人会は団結力が強く会合も多くしており、このことが脱退を決めた理由にもなっている。このようなことは他の地区では見られなかったことなので、ここでは中田婦人会をとりあげたい。

中田婦人会は、会長と役員 3 名が中心となって運営している。また、行事ごとに、連絡係や会計を皆が分担して行っているようだ。20 名が在籍しており、会費は毎月 500 円で、この会費はほとんど懇親会のときの食事に積み立てている。中田婦人会の活動内容としては、「簡易保険の集金」、「旅行」、「生活改善センターの掃除」がある。「簡易保険の集金」は昔から行われていて、手数料を婦人会の運営費にしたり、生活改善センターで使う掃除機や食器を買ったりするなど区への寄付にあてている。「旅行」は年に 1 回、会員の親睦を目的として行っている。県外の観光地へ宿泊つきで行くことが多いようだ。これらの活動は全て東若山婦人会に所属していたときから継続しているものであり、脱退したいま、新たな活動を始めるかどうかはまだ協議中だそうだ。

3.4 若山町文化祭での婦人会の活動

ここでは、文化祭での東若山婦人会の活動の様子について、私が実際に見た内容と聞き取りで得た情報をもとに述べていきたい。

平成 24 (2012) 年 11 月 4 日、午前 9 時から午後 3 時という日程で、第 29 回若山町文化祭が開催された。会場は珠洲市立若山公民館と珠洲市立若山小学校体育館である。文化祭は、地域文化交流の場、生涯学習・芸能発表の場、地域発展などを目的として、昭和 59 (1984) 年の第 1 回から、毎年秋に文化祭実行委員会と若山公民館が主催している。実行委員には 23 名在籍しており、

それには区長や婦人会会長などが含まれている。

毎年メインテーマが決められており、今回は「黄綬褒章受章・現代の名工受賞」【前良平 酒づくり 50 年のあゆみ】ということで、公民館の講堂には、前さんの業績に加えて、酒づくりに関する工程写真や資料などが展示されていた。公民館内には他にも、一般余技展として、書道、絵画、水墨画、写真、生け花、手工芸、菊花などが展示されていて、和室ではお茶席もひらかれていた。写真 1 は、一般余技展の様子である。小学校体育館では、小学校児童による作品展示と、芸能発表が行われていた。写真 2 は、芸能発表の様子である。小学生や婦人会をはじめとして、さまざまな団体が踊りや演奏を披露する場となっていた。体育館には常に多くの人達が集まり芸能発表を見ていた。また、小学校体育館前駐車場では、模擬店がひらかれていた。青年福



写真 1 公民館での一般余技展（筆者撮影）



写真 2 小学校体育館での芸能発表（筆者撮影）

表 3 文化祭当日の日程

	(午前) 9	10	(午後) 1	3
若山公民館	作品展示			
	お茶席			
若山小学校体育館		芸能発表		
	小学校児童の作品展示			
体育館前駐車場	模擬店・フリーマーケット			

(出所：第 29 回若山町文化祭プログラム内にあった表を一部改変したもの)

社員・青年団による、やきそば・大福・フランクフルト・ポップコーンなどの販売と、若富喜会という高齢者団体による地元特産品の販売がされていた。同じくそこで東若山婦人会はフリーマーケットをひらいていた。表3は、文化祭当日の日程を簡単にまとめたものである。

文化祭における東若山婦人会の活動内容は、「フリーマーケット」と「芸能発表」への参加である。今回参加したのは40名ほどだそうだ。

写真3は、フリーマーケットの様子である。しいたけなどの乾燥類、洗剤、ガラス製品、飾り物などの家庭用品を販売していた。会員からの物品集めや値札付けなど、準備には2週間ほどかかったそうだ。その他にも、ホットコーヒーや、業者から取り寄せた果物、菓子類なども販売していた。午後11時には、フリーマーケットの多くの商品は売れてしまったようで、売り上げはよかったと笑顔で話してくれた。この売り上げは婦人会の運営費に当てる。

今回、芸能発表で東若山婦人会は、「レディースコーラス」という名で合唱を披露した。去年(2011年)までは「東若山婦人会」として参加していたが、今年は婦人会内でなかなか人数が集まらなかった。そのため、姑さんがお嫁さんを誘うなど、婦人会に所属していない若い人たちにも呼びかけて、東若山地区にいる女性たちで、「レディースコーラス」を結成したという。メンバーは、20～70代の20名ほどで、3週間前から公民館で合唱の練習をしていた。参加したHさん(火宮、女性、60代)は、「今年は雰囲気も変えることができたし、やってよかった」と話してくれた。しかしこの「レディースコーラス」は、文化祭のためだけの団体であって、今後の活動はないという。



写真3 駐車場での東若山婦人会によるフリーマーケット(筆者撮影)

3.5 婦人会活動の現状

地域の女性活動組織として、若山町5地区にある2つの婦人会について調査をし、その幅広い活動内容にとっても感心した。文化祭においては、実際に東若山婦人会の活動をみて、女性の活き活きとした姿というのは全体にも活気を与えるのだと感じた。かつて東若山婦人会に在籍してい

たIさん（火宮、女性、80代）は、「昔は家柄のいい人しか婦人会に入れなかったが、今では誰でも入ることができる。自分が会長をしていた頃（約35年前）は茶の飲み方、行儀作法などを学んだりしていたが、今は楽しみや娯楽としても婦人会が機能している」と話してくれた。もともとは戦後の憲法によって婦人に新しい位置が与えられながらも、社会機構のなかで不安定であった婦人の位置を安定させるために発足された婦人会であったが、その女性の位置も確立されつつある現在においては、婦人会に対する考え方やその活動内容も変化し、婦人会は女性にとってより身近な存在になっているのかもしれない。その一方で、中田婦人会のJさん（中田、女性、70代）は、「昔は、婦人会に入るのは当たり前・義務というように考えられていて、子どもをおんぶしながらも会合に行った。今では若い人も少ないし、入るのを嫌がる人もいる。入るか入らないかは自由だという考えや、仕事もあるし、その上婦人会でのしごらみにとらわれたくないという考えもある。このような風潮もあってか、中田婦人会は東若山の婦人会から簡単に脱退をしたし、それができたのかもしれない。」と話してくれた。

4. 考察

これまで、若山町5地区の女性の暮らしについて、家庭内外での仕事と地域における女性組織での活動という2つの側面からみてきた。それぞれが若山町5地区において特有なものだと感じ、この地域における女性の暮らしを知るのに大きな手がかりとなったと思う。しかし、若山町5地区の女性の暮らしについて理解を深めていくうちに、彼女らの暮らしは、それを取りまく環境とともに大きく変化していることに気づいた。

まず家庭内外での仕事についてだが、第2節でも述べた通り、誘致条例による工場の進出は、かつてない農外労働力市場の拡大となり、これによって多くの女性たちが農外へと流出した。それでも女性は農業の主要な担い手としてあり続け、農外での労働と並行して農業にも従事していたが、農業収入の低下や耕地整理によって農家数は減少してしまう。現在、若・中年層で農業をする人は30、40年前と比べて明らかに少なく、農業をしているのは65歳以上がほとんどである。また、ほとんどの縫製工場は倒産していることもあって、女性の働き口も昔と比べるとずいぶん多種多様となった。これらのことは、農業や農外での仕事場において、家族内や地域内での世代をこえる女性同士の交流が少なくなったことも意味すると考えられる。したがって若山町5地区において、家庭内外での仕事内容とその背景にある女性の暮らしは、数十年前と現在とは大きく違うことが分かる。

次に婦人会についてだが、第3節でも述べた通り、女性の地位の向上によって、女性にとって婦人会はより身近な存在になったかのように思われたが、調査をするうちに、参加人数の少なさ、

婦人会からの脱退、年齢層での意識の違い、といった多くの問題もみえてきた。文化祭では、30～40代の女性にも何人かお話を聞くことができたが、ほぼ全員が婦人会には参加していないと答え、今後も婦人会に入会するかどうかは分からないと言っていた。理由としては、ほとんどが上の世代なので入ることに違和感を持っていることや、仕事や子育てで余裕がないというように話してくれた。またKさん（経念、女性、30代）は、「子どもを通しての保護者同士の交流はあるし、同年代の女性とのつながりはできている。」と話してくれた。もともと婦人会に求められていた学習や婦人同士の交流、地域貢献などといったものは、いまや学校教育、仕事場、または保護者同士での私的な付き合いなど他のもので代用されているのかもしれない。婦人会に対し関心を示さなくなっているのは世代に関係ないが、このような若い世代の風潮が上の世代にも伝わっているのだと思われる。

このように、若山町5地区という同じ土地で暮らしてきたことには変わらないが、女性の暮らしを取り囲む環境は大きく変化してきた。これには、国全体における国民生活の向上はもちろん、若山町5地区ならではの高齢化や農家数の減少、さらには女性の社会進出といったものが関係しているだろう。そしてその結果、若・中年層と高齢者層における世代間での暮らしの違いが、お互いにどこか距離感をもたせ、相容れないという結果を生んでしまっているのではないだろうか。

5. おわりに

若山町5地区における女性の暮らしについて、文献や聞き取りから得たさまざまなデータをもとに調査をしてきたが、若・中年層の女性の暮らしをとりまく環境、さらに若・中年層と高齢者層の女性が互いにもつそれぞれの思いに関して十分な調査ができなかったことをここで反省したい。しかしながら、今回の調査を通して、この数十年のあいだに女性の暮らしを取り囲む環境は大きく変化したことが分かり、またそれによって、暮らしだけでなく考え方や意識的な面において、世代間で大きな違いが生じているのではないかと考えた。このことに関して、若・中年層がほとんど婦人会に在籍しておらず、今後も入会するかどうか分からないということに、私は危機感を覚えた。昔と比べると、女性の暮らしのなかで婦人会はそれほど大きな役割をもたないかもしれない。しかし、婦人会の活動は地域と密接につながっており、また女性の社会進出が進んだいま、地域にとっての婦人会の活動はより大きな役割をもったにちがいない。今回の調査を通じて何回も若山町5地区を訪れ、そして多くの人と話をするなかで、やはり地域を活性化するには、地域住民同士の結びつきが大切だと感じた。ぜひとも婦人会の活動を通して、これからもずっと若山地区を盛り上げていってほしいと思う。

世代間での人口や考えの違いが広まるなかで、お互いがどう理解し支えあい、活躍していくべ

きかについて非常に考えさせられたとともに、このような問題に関して興味が沸いた。また、同じような問題は社会の多くの場に見受けられると考える。今回の調査を通して分かったことや反省点をふまえて、今後に活かしていきたいと強く感じた。

最後に、聞き取り調査にご協力していただいた多くの若山町 5 地区の女性の方々と、文化祭にて突然の訪問にも関わらず親切に迎え入れてくれた若山の皆様に深く感謝するとともに厚くお礼申し上げます。テーマの設定上、少々答えづらいプライベートな質問が多かったにも関わらず、温かく丁寧にお答えいただき、本当にありがとうございました。皆様が、私の調査に真剣に向き合っていただき、それぞれの思いを真っ直ぐに伝えてくれたおかげで、私自身さまざまなことを考えさせられ、これからの人生においても必ず役にたつ貴重な経験となりました。